

女性も社会を支える時代。

自分の可能性を広げていきましょ。

「国境のない仕事に就きたい」というのは、子どもの頃からの夢だったそうですが、それがいつ頃からUNHCRで働きたいという、具体的な仕事に結びついていったのですか。

外国に関心を持つようになったのは小学生の頃からです。世界地図を見るのが大好きで、まるでマンガの本を読むように見入っていたのを覚えています。世界には様々な国、様々な考えの人がいることを知り、漠然とですが、「国境のない仕事に就きたい」という思いを抱くようになりまし。ところが、友人たちが次々と将来の職業を決めていくなかで、私は大学を卒業する頃になつても、自分の思いを実現するにはどんな仕事に就いたらいいのか、なかなか見つけられずじまつたのです。

そんな私が難民の保護や支援をする現在の仕事にめぐりあえたのは、様々な人との出会いがあったからです。

日本に国連大学ができたときに出会ったある理事の方から、国連に入ることを薦められました。また、一時期勤めていた「日本国際社会事業団」では、家庭をもちながら働く多くの先輩女性たちから、「生涯仕事をするなら大学院に入って

専門知識を高めなさい」と助言していただきました。そして8年間、勉強と経験を積んだ結果、UNHCRに勤めることができたのです。

国連という仕事上、家庭生活との両立がむずかしかったと思うのですが、仕事を続けていくうえで、結婚が障害になるとはお考えになりませんでしたか。

いいえ。夫との間で結婚の話が出たときも、結婚か仕事かで迷うことはありません。

UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）は、難民の保護や援助を行う国連の機関です。現在、近藤眞智子さんは、そのBangladesh事務所代表として、ミャンマーなどから逃れてきた難民の保護や自立のための支援活動にあたられています。「国境のない仕事に就くのが夢でした」という近藤さんに、仕事に対する熱意と働くことの素晴らしさについて語っていただきました。

働くことは私の
アイデンティティそのものです

The Interview

近藤 UNHCR
Bangladesh事務所代表
眞智子さん



せんでした。むしろ、自立。もし自立しないまま結婚してしまつたら、自分を高めるチャンスが失つてしまつと思つていました。いま気づいたのですが、その証拠に、UNHCRに入るうと決めた年に私、結婚しているんですね。夫も「あとになって本当はその仕事やりたかつた」と、後悔されても責任がとれない。自分の思うように生きてみたら」と言つてくれました。

国連の国際職員は自国で勤務することがまれなので、お互い仕事を持つている場合、離れて生活せざるを得ません。そのため、休暇を調整しあうなどして、できるだけ一緒に生活を楽しめる時間をつくるようにしています。当時は私たちのようにお互いの生き方を尊重しあい、離れて暮らすケースはまだ奇異な目でみられることもあったのですが、最近ではだいぶ受け入れられるようになりましたね。ジュネーブで私の秘書をしてくれた女性は、彼女が働き、夫が家のことを受け持つスタイルをとっていました。

私たちは平和な日本にいて、世界には命の危険にさらされたり、生活に困る多くの難民がいる現実を忘れてしまいがちですが、バングラデシュでは、いま主にどんな活動に力を注いでいらっしゃるのですか。

私たちは世界から難民がなくなる日を願つて活動をしています。冷戦後の難民の80%は女性たちなんです。こうした女性を自立させない限り、難民でなくなる

日はきません。ですから、バングラデシュでも将来自国に帰れる日に備えて、手に職をつけるプロジェクトを取り入れています。イスラム教を考慮し、家庭でもできる仕事としてお裁縫を教えているのですが、120人くらいの女性たちが衣類を縫えるようになりました。

私は、難民の女性に限らず、女性も自立して生きるほうが楽だと思つています。人に依存しきつて生きるのはとても不安です。それに家庭を支える柱も1本より2本のほうが心強いでしょう。最終的には男性の生き方の開放にもつながるし、仕事と家庭を分け合えば、人間らしい生活の回復にもつながると思つています。

残念ながら、日本では結婚や出産を機に、仕事を辞めてしまう女性も多いのですが、女性が自立し、自分の可能性を広げたいけるような社会にしていくにはどんなこと

一が必要だとお考えですか。

女性にも活躍できる機会を均等に与えること、家庭を持ちながら働ける社会的な制度を整えることなどが必要だと思つています。現在、UNHCRでは全職員の4割が女性ですが、国連本部の方針、そして緒方貞子前国連難民高等弁務官の働きかけで、90年代以降女性が活躍できる下地が整えられてきました。現在アジア地域で事務所代表を務める女性は私1人ですが、底辺が広がってきているので、これからもっと活躍する女性が増えてくることでしょう。

もう一つ、私の経験から大事だと思うのは、家庭内での親子のかかわり方です。私はあるとき、「女性も自立する社会がくる」と言つた父のひと言が深く胸に残つていて、自分の生き方を決めるうえでとても役に立ちました。母からも「あなた

ことは一度もありません。うちでは兄たちも同じように台所も手伝つていたし、その他の家事なども手分けしてみんなやつていました。こうした生活経験があることがとても大切だと思つています。

最後に、これから社会に出て働く女性たちに向けて、アドバイスをあわせてください。

働くことの素晴らしさは、まず社会とのつながりを直接持つることです。私は多くの人からたくさんのお話を聞かれました。それから自分の人生の目標を達成する喜びが得られること、そして自分の足で立っている誇りが持つること。こうした体験は働くことを抜かしてほかにないと思つています。働くことはまさに私のアイデンティティそのものです。

私の父が論してくれたように、女性も社会を支えていく時代です。みなさんも一歩前に進む勇氣を持つて、自分の可能性にチャレンジしていつてくださいます。



バングラデシュ・ミャンマー難民キャンプで植樹週間のため苗を手渡す近藤さん



プロフィール◆さいたま市出身。1947年生まれ。青山学院大学法学部卒。アメリカ ケース・ウェスタン・リザーヴ大学にて社会行政学修士号取得。日本国際社会事業団勤務を経て、1983年、UNHCRジュネーブ本部に勤務。ソマリア、パキスタン、インドネシア等の事務所勤務を経て、1996年日本・韓国地域事務所副代表に。2000年よりバングラデシュ事務所代表を務める。

国連難民支援の
お問い合わせはこちらへ

特定非営利活動法人
日本国連HCR協会
〒150-0001 渋谷区神宮前5-53-70
UNハウス6階UNHCR内
TEL : 03-3499-2450
FAX : 03-3499-2273
<http://www.japanforunhcr.org>

自分らしい人生を歩むには、
自立して生きることが大切だと思つています。